山崎郷土研究会報
No. 70
62. 9. 1
兵庫県宍粟郡
山崎町教育委員会内
山崎郷土研究会
電話 62－2000

近世初頭の山崎藩（二十八）

島田　清

二、池田輝澄時代（続二十七）

○ 池田家家臣団と「種火（たねび）」のくすぶり

〝物頭〟というのは、近世諸藩が設けた職制で、弓組・鉄砲組・槍組など、足軽・同心衆のそれぞれの組の責任者（頭（かしら））をいう。山崎藩には、当時、十一の組があった。そのため、それぞれの組の頭が集まり、鉄砲組の石丸・小川両氏配下の足軽が、金銭出入の問題で事件を起こした責任をとらせ、これらのものの扶持を放した（解雇した）のである。と同時に、旗奉行別所六左衛門配下の小頭も扶持を放たれた。

このころ、事件処理の原則と考えられていたものに「喧嘩両成敗」がある。これは、喧嘩の当事者双方に対して、理非を問わず、制裁を加える、という刑法で、理非を重んじた鎌倉幕府のもとでは用いられなかった。しかし、南北朝の動乱が起こり、その後も争乱が絶えなかったので室町幕府はこの制を採用し、戦国大名もこれを引継いだ。

江戸時代に入ると秩序が確立し、一般の教養も高まったので、このような便宜的武断主義の法は適当でないと考えられ、江戸時代法制の根底となった「御定書（おさだめがき）百ケ条」にも、喧嘩両成敗のことは記していない。元禄十四年（一七〇一）、浅野長矩の殿中刃傷事件を処断するに当たって理非を正し、長矩ひとりを処罰したのも、それを明示したものといってよい。しかし、社会的通念、ならびに慣習には、なお、このことが残っていた。吉良上野介の浅野内匠頭に対する取扱いが不親切であったことと関連しているけれども、この刃傷事件を双方の喧嘩と

目　次

一、近世初頭の山崎藩（二十八）……島田　清……1
二、丸のついた宍粟郡の山名……建部恵潤……5
三、山崎六地蔵物語 ＝ 延命地蔵の巻……6
四、古地名小嘶、鹿沢・遠藤坂……資料部……7
五、総道神社由緒記……9
六、春の研修旅行記……志水美好……10
七、「しゝさは」「志佐波」目次集……12
八、部会構成・地区幹事一覧……16
九、事務局だより……17

見、両者を同罪にすべきだ、と主張するものがあり、幕府の浅野氏ひとりを処断したのを非難するもののあったのがその証拠である。「赤穂浪士」の「仇討」を擁護する世論はここから形成されたといってよく、その高まりは、彼らを「義士」とたたえるまでになるのである。

旗奉行の別所六左衛門は、寛永元年（一六二四）、輝澄に召し抱えられた。元和元年（一六一五）に立藩した池田輝澄の家中は、このときまでに十年を経過している。したがって、〝新参〟の部に入れられたのも当然である。

池田輝澄の家臣団は、もともと、兄忠継の遺臣を中心に構成されていた。忠継は、父輝政が薨去した慶長十八年（一六一三）、本領の備前一国に播磨の宍粟・佐用・赤穂三郡十万石を加えた三十八万石余を与えられ、翌、十九年にはその軍勢を引きつれて大阪冬の陣に参加した。しかし、凱旋後の二十年二月、疱瘡を病んで急死した。まだ十七歳であったため後嗣がなく、十四歳の同母弟忠雄に備前三十一万五千石を、十二歳の輝澄に宍粟郡三万八千石、十一歳の政綱に赤穂郡二万五千石、四歳の輝興に佐用郡二万五千石を分与された。したがって、それぞれの家臣団は、忠継の遺臣を、適宜、配属させたのであった。

その後、必要に応じ、また、いろいろの事情から、新しい家臣が召し抱えられた。国許の家老として、領邑の施政に当った伊木伊織は、元和四年（一六一八）の召抱である。伊織の父清兵衛は、輝政に仕えて筆頭家老となり、豊後守忠次と名乗った人である。輝政が三河吉田城主であったころから傍にあって補佐し、関ケ原合戦後、輝政が播磨一国の国主になってからは帷幄にあって、その政をたすけた。病気にかかり、末期になったとき、

〝今生の望に、今一度、殿の御目にかかりたい。〟

といったので、輝政は急いで家に赴き、枕もとに坐って、

〝いかに清兵衛。かようのこととも知らなかった。跡目は相違ないぞ。ほかに思うこあらば申し置くがよい。その望に従うであろう。〟

と、ねんごろに言った。

忠次は頭をあげ、

〝是までの御入、ありがたく、冥加至極に存じます。遺跡のことは、愚息の覚悟次第に仰付け下さい。ただ、一言、申しあげたきことは、殿には、常に掘出を好ませ給い、殿に、士の掘出を専らに思召す

表装全般　…古いものを大切に…

表具師　松本永春堂

山崎町鹿沢本通り
TEL. 62－0122

が、これは、よからぬ御癖にござりまする。士は、その分限より、一際、宜しく仰付けられてこそ、永く、御家を立去らず、忠節を存じましょう。〃

と諫めた。輝政はつくづくと聞いていたが、おもむろに、

〃只今の諫言、道理至極じゃ。その志、山より高く、海より深い。生前に於て、必ず忘れまい。心安く思えよ。〃

と忠次の手を取り、涙を流して名残を惜しんだ。池田家の家風は、これ以後、ますますよくなった、と伝えられている。

忠次の後嗣、長男の忠繁は長門守と名乗り、東播の要衝、三木城をあずかっていた。輝政は、慶長六年（一六〇一）、新しい姫路城と城下町を構築するにあたり、忠繁を縄張りの総奉行に任じ、忠繁は丹誠をこめて現在見る姫路城と城下町をつくりあげた。伊織は、この忠繁の実弟である。大阪役後、本多美濃守包政に仕え、その後、牢人していたのを元和四年、五千石で召し抱えられ、家老として藩内に重きをなすこととなったのである。この辺の事情は、特に記したものがないのでわからないが、その家柄といい、周囲の人脈といい、池田家では、最も重要な地位を占めていたことはまちがいない。

伊織と同じく本多家に仕え、牢人したのち、輝澄に召し抱えられたものに菅友伯があった。もと、大阪城内で豊臣秀頼に儒学を講じ、存庵と称していたが、池田家仕官に際し、菅友伯と改めたものである。仕官の手蔓は、その叔母が、輝澄の側室であったところからと思われる。

伊織と友伯は、もともと、同じ本多家にいたことであり、仕官の時期もだいたい同じであったらしいから、当初は、互に往来し、親密であった。しかし、のち、しだいに疎遠になった、という。

このことは、何が原因となったのだろうか。察するに、友伯の〃性格〃が、大きな原因となっているように思う。これからあとに出てくる人事問題、あるいは、事件取り扱いについての対応経過を見ていると、そのことがわかってくるわけで、池田家に騒動が持ちあがる重要な因子も、彼によってつくられていったように思う。

輝澄は、あるとき、「伊織の同役を召し抱えたい」と側近に洩らした。伊織ひとりがだんとつの禄を食み、藩政の切り盛りをするのはよくないため、相役、すなわち相談相手をこしらえておこう、というのである。このことは、一般的にいって、もっともなことで、どの藩でも多く行っている。ところが、このとき、その斡旋にあたったのが友伯であった。なぜ、友伯がこの仕事に携わったのかよくわからないが、推察すると、秀頼の儒官であった、という前歴から、輝澄の近くに仕え、その学問や社会常識の顧問的存在であったらしいことがひとつ。叔母が側室であるところから、何かと心安い感じで輝澄に接していたこと（場合によっては、友伯が叔母にはかり、その意図するところを叔母の口から輝澄の耳に入れることもできたと思われる）がひとつ、取りあげられる。しかし、結果的にいって、このことは、あまり、好ましい果実をもたらさなかった。というのは、友伯のような人物は、人の世

話をしても、人と人の間に入り、それをいろいろとあやつり、混乱や迷惑を生ぜしめて楽しむ、という傾向を持つものであったからである。それだけに、第二家老となるべき人物を召し抱えたい、という輝澄の意図を知ると、進んで斡旋に乗り出し、熱心に努力する。しかし、その推輓する人物は、それなりの癖をもち、将来、友伯と一連の徒党的関係を結ぶ人であった。その人物——このとき、友伯が推輓し、輝澄が召し抱えた人物——が、すなわち、小河四郎右衛門である。

小河四郎右衛門は、もと、大阪城の豊臣家に仕え、武功あるものとして知られていたという。伊織と友伯が、本多家に仕えていた同僚であったという以前、豊臣家仕官時代の朋輩であったのが、小河と友伯の間柄であり、友伯にとっては、伊織より、小河の方が、或いは、いっそうの親しさを抱いていたのかも知れない。友伯と伊織が、池田家仕官直後は互いに往来し、親密であったのに、のち、疎遠になった、というのも、この小河四郎右衛門が友伯の推挙によって三千石の次席家老に就任したことに、かかわりのあったことはたしかであろう。

旗奉行の別所六左衛門も、また、友伯の肝煎で召し抱えられた一人で、その就任は小河よりおそく、寛永元年(一六二四)であった。小河・別所など、「新参」と呼ばれる藩士たちが、友伯を軸としてつらなっていたことは、藩内に、ひとつの権力グループを形成し、やがて、対抗勢力との間に、確執を生ずることとなるのは、たやすく推察できるところである。

小河四郎右衛門は、ある日、喧嘩を取り扱った物頭十一人を呼び、

〝何とか別所の組にも少々の勝をつけ、彼らが憤らないようにしてほしい。〟

と談合した。これは、別所六左衛門が、不満を小河にぶちまけていたためであろう。別所にしてみれば、配下の小頭が金を貸し、相手が催促に応じて返済すべき金を返さなかったから打擲したまでで、それが双方のなぐりあいになった、すなわち、喧嘩になったからといって、喧嘩両成敗の取り扱いを受けたのは納得できない、というのである。別所側としては、あくまで理非を正し、別所方が正しいことを認めるとともに、別所方が受けた制裁をゆるめるか、或いは、取り消すか、どちらかにしてほしい、というのであろう。これが、いったん、消えたかに見えていた別所の小頭金貸し事件決着をゆるがせ、新しい事態に発展させる契機となるのである。一見、何でもないように見えるこの発言が、実は、「騒動の種火」をくすぶらせ、徐々に燃えあがら

本のある生活を——

さつき書房

山崎町鹿沢 55-3
☎(0790)62-4674

せて行くものであることは、このとき、まだ、誰ひとり、思う人はなかった。

丸のついた宍粟郡の山名

建部恵潤

山を意味する名称には、山のほかに峰・岳・根・尾・森などがある。兵庫県では大部分が「山」であってヤマと呼ぶものが多い。三室山（千種町）、藤無山（一宮町）、笠形山、七種山（神崎郡）、大撫山（佐用町）、神鍋山、鉢伏山などがある。「山」をサン（ザン）と呼びならわしている山も多い。長水山、黒尾山、雪彦山、三濃山、書写山、六甲山などがある。さらに「山」をセン（ゼン）と呼ぶ山名が鳥取県の大山を中心に、鳥取・岡山県界に多く、中国山地に分布している。兵庫・鳥取県境の氷の山（須加の山）、扇の山は分布の東端に当たっている。これには山（セン）に仙（セン）を当て字した山名もみられるが、兵庫県には無いようである。

「峰」のつく山名もかなりある。千ヶ峰、篠ヶ峰（多可郡）、段ヶ峰（一宮町と朝来郡境）、須留ヶ峰（朝来・養父郡境）、砥峰（神崎郡大河内町）が知られている。レジャーセンター化した峯山はヤマ・ヤマの重複語である。宍粟郡には一宮町百千家満の高峰がある。『播磨国風土記』御方里の志爾嵩で、伊和大神と天日槍命が黒葛を投げあって国占め争いをした山で、御形神社はここにあったと伝えている。「峰」のつく山名は朝来・神崎・宍粟三郡の郡境周辺と多可郡北部に局地的に分布しているようである。

岳（ダケ・タケ）のつく山名には但馬の蘇武岳、来日岳と多紀連山県立自然公園の小金岳、三岳・西ヶ岳が有名で、近くに盃ヶ岳（四九五メートル）もある。広く各地にみられる三国岳（山）は県下に三座ある。播磨・但馬・丹波三国の寄り集まった多可・朝来・氷上三郡境の三国岳（八五五メートル）は山名にふさわしいが、多紀郡東端、三田市北端の三国岳は山頂から丹波・摂津・播磨三国が見えるので付いた山名らしい。「岳」がついた山は山頂部が岩山であったり、巨大な岩壁であったりする。典型的なのは多紀連山で岩山であり、山麓には庭石の採石場があり、火打岩という村落もあって火打石の産地であったという。尾根の岩山にはイワタケが着いていた。雪彦山も主峰は岩山で不行岳と呼び、ロッククライミングの適地として知られている。いかにも岩山だと思わせるのが神戸市千刈水源地のほとりにある大岩ヶ岳である。目立たない山でも山頂付近に巨岩、岩壁があって遠くからでも見える山を岳（ダケ）と呼び、安富町には鎌倉岳（栃原）、大岳・紅岳（皆河）がある。この地方では山の基岩が露出したものをダケと呼ぶのである。宍粟郡にも土地の人しか知らない「岳」と呼ぶ山が各町に点在しているであろう。

「根」を語尾につけた山名は県下ではまだ知らないが、「尾」のついた山名には出石郡但東町の東・西床尾山、宝塚市長尾山、神戸市北区高尾山などがあり、いずれも重複語になっている。「森」をつけた山名は淡路津名山地の伊勢ノ森が県下唯一の山名のようである。

ところで、安富町には語尾に「丸」がつく山名がある。山崎町との

境界を限る尾根に高くそびえ、山崎町側は三谷に所属している。末広、皆河から登れる淡路ヶ丸（五三四㍍）で、戦前は春休みになると小学生は弁当持ちで、上級生の先導で登ったものである。道らしい道もないところを登った。登り易いところが上級生から下級生へつぎつぎ実地に伝えられていたのである。頂上へ登ると海が見え、かなたにかすかに見えるのは淡路島だといわれ、淡路が見えるから淡路ヶ丸というのだといわれていた。そのころから、なぜ山といわないで船のように丸というのか不思議に思われてならなかった。中学生になって兵庫県地図でさがしてみたが、県下の高い山に丸のつく山名は見当たらなかった。中学は旧制龍野中学校であったが、近くの揖西村（現龍野市揖西町）に小犬丸という村落があるのを知ると疑問はさらに深まった。そのうち植物にうつつをぬかし、近年地名の研究を始めると再び気になりはじめた。詳しい考証ははぶくが、語尾につく「丸」には村落を意味するもの、城郭に由来するもの、山を意味するものがある。東京の丸の内、明石市上の丸、近世城郭跡の丸のつく地名は城郭の区画名が残ったものであり、小犬丸のような村落名は中世名田の所有者名に由来するようである。

前述のように県下の高い山には「丸」のついた山名はないが、地図には現れない淡路ヶ丸のように、土地では語尾に「丸」をつけて呼ぶ山がほかにもあると思われる。赤松氏の山城があった山崎町の篠ノ丸はその一例である。苦言を呈するなら山崎では篠ノ丸城を主体に考えていて、白旗城、亀（城）山城、長水城、天神山城など中世の山城の多くが山名によったことを知らないのか、「丸」のついた山名であるのを知らない人が多いようである。中には「丸」は城のことだという人もあった。篠ノ丸という山に築いたので篠ノ丸城と名づけたことを認識し、篠ノ丸という珍しい山名をもっと大切にしていただきたいと思う。

（六二・八・一）

創業嘉永元年　きものと共に130余年
高級呉服の専門店
とくさや
山崎町本町（さつき通）
☎(0790)62-1680代

山崎六地蔵物語＝延命地蔵の巻

（泉龍寺地蔵堂の由来）

当境内にある地蔵尊は初め延命地蔵と称し、今より三百五十年程昔、尼ケ鼻崖下寺町に有りて北向き地蔵とて特に霊験あらたかなり、其の由来書に曰く「夫れ佛種を頌（たた）える者は縁起に従い今当寺に有る石躰の地蔵菩薩は往昔一人の男有りて、久しく武家に仕えて其の性強暴也、中年に至りその過ちを発心して当住持慶空上人の処に来りて、而うし

て衆髪を剃除し「善西」と号す。道心堅固にして先非を悔いて、此の地の地蔵菩薩を尊崇し石灯籠を造立し並に一具の佛餉を寄附し畢ぬ」其の後諸人参詣して立願するに忽ちにして千慈を成す。後ち又当寺壇家西村正圓政明雨露の尊像にひたたるを見て、又香花燃灯の備えざるを憂え、享保八年癸卯発心して之に荘厳なる雨蓋を以て屋根を覆わんと自ら企つ、参詣の道俗四事供養して其の欲するを得たり。然るに又一両輩の信者有りて百余の善男善女、月次三銭の講を企つ。之によって改造を以て六本骨柱瓦葺と為す。享保十七年壬子夏其の功を畢ぬ。尚是れより以来風雨の害を除く、諸人は信心を増進して菩薩の慈悲を乞うて、親疎の有情を引導し給へと云う。

見住
逸堂叟

享保十七年
壬子暦林鐘上旬

（泉龍寺古文書）

外科・内科
山中医院
院長 山中陽一
山崎町西町・TEL⑫0036

古地名小噺

鹿沢・遠藤坂

資料部

鹿沢は今は字地名になっているが古くは地名では無く城名である。昔、山崎史談会の古老達の伝承噺によれば、元和元年（一六一五）、松平石見守（池田輝澄）が宍粟三万八千石を賜り柏野郷山崎村元尼子氏が砦の跡に居城を構え宍粟城と称した。さらに寛永八年、佐用郡を加封されて六万三千石となり、城も城下町も整えられて行ったが、同十六年、御家に騒動が起こり郡邑不治の罪で領地を没収され、その跡へ松平周防守が泉州岸和田城より転封されて来城、宍粟・佐用の両郡合わせて六万石を賜り、佐用郡の内一万石は弟達三人に与え自分は両郡で五万石を領した。

入城後城下町も一層良く整えられたが、周防守は前城主が罪科を蒙り公儀に収公された城名を忌み嫌い宍佐和城と改名した。即ち、宍粟郡と佐用郡を和せ持ちたる城という意味である。此の城名は周防守の城代家老岡田竹右衛門が佐用の代官岡田外記に宛てた書簡の中にも見られる。

「御殿様本日八ツ半刻完佐和の御城を御出まし被成、佐用の御領地御見廻り被成候に付当日午の下刻平福迄御出迎え可有之飛札を持て御伝え申上候」とあり文献中にも見ることが出来る。（姫路市在住・岡田氏所有）併し松平周防守が慶安二年石州浜田へ移封の後、次の領主松平備後守は宍粟郡の中にて三万石を領することとなり佐用郡は切離れ

てしまったので、又、元の宍粟城ということになる。併し此の松平家も三代目数馬で断絶し宍粟郡は天領地に分割され、其の中、山崎周辺一万石は本多忠英の領地となり延宝七年、和州郡山より転封され入城す。以来、御城地の居館を完沢の御陣屋と称される。

では完沢が鹿沢となったのは何時の頃からか定かではないが、古老の談によると一説には享保年間藩祖本多忠勝公の映世霊神の御画像を当地に御迎えし当城郭内に安置し祭祀されてより、藩祖が鹿の頭の御兜を召して世に映り出たる御姿を象徴して当城地を鹿沢の御城と称し奉るという話である。又、一説には此の郡は昔、鹿が沢山生息していて、播磨風土記にも天日鉾が瀬戸内海より播磨に上陸し揖保川に添うて逆登ること数里、矢多造りの邑にて多くの矢を射込まれた手負いの大鹿に出遭う。よって、此の地を鹿遭うの里と名付けたり、後鹿遭郡が次第に完粟郡となったという。又、此の国は山嶽地で水稲に向かない地で大和朝への貢物も生捕にした鹿や獣皮、乾肉等に粟粟稗など山畑の穀物を多く納めたので、奈良の木簡にも完禾の郡、又は完粟郡等となったと山崎史談会会報「ししさわ」に記されている。

よって、鹿沢山の領地ということから城名も鹿沢城となったとか、いずれもこじつけの様でもあるが。

江戸時代は鹿という字をシシと読んだ。鹿狩鹿垣を廻ぐらすなど文献にも良く書かれている。猪は、いのししと言う。鹿沢城という言葉は古い書物の中にはあまり見られないが、一般に古老達は郭内を御家中と称していたから、又、三の丸郭内にも東から江戸町、桜之町、本多町、二軒町、三軒町、六軒町、通町、仲之町、松原町等々、町名があったからでもある。しかし何れにせよ鹿沢町という字地名が正式に生まれるのは明治初年のことで、旧山崎藩郭内をすべて鹿沢町と称す、と新政府へ報告されて初めて城名が地名となったのである。又、明治六年、城取り壊し令が全国に発令され、いずれの藩庁も城の一部を壊して申訳的にその令にこたえたが、大きな城は取り壊しの費用に窮し政府に借金を申し出る有様で此の令も徹底せず、うやむやに終ったということである。

山崎でも表門と裏門を取除き、石垣と土堤の一部を崩して城下村への新道路の建設を計画したのは旧藩士遠藤亘氏であった。従兄に当る元普請奉行の岡本半太夫氏も同意の一人であったが費用に窮して建設は思うようには捗らなかった。城郭を崩し堀を埋めてしまうことには残住する旧藩士の間にも反対する者が多く、やはり永年勤めてきた陣屋の型が消えて行くのは旧藩士にとって名残おしかったのである。むしろ町の衆の方が協力的であった。城跡が学校となり自分達の子弟も

就学出来るし、過去に堀の泥浚えで使役にかり出された人達にとっては苦い思い出の一つでもあったので、堀を埋めることは町の住人の廃棄物で案外容易であったが、城下村の農地を道路に買収することは又一段と難儀なことであった。

併し遠藤亘氏はあきらめなかった。山崎町産業発展のためにも龍野、網干へ通ずる新道路を完成させねばと私財を投げ出し、家屋敷も抵当に入れ、一人娘も町の有力者へ嫁がせ、城の石垣も大きな石は石屋に売って金に変え、町人の協力を呼びかけた。人々は此の新道路の坂道を遠藤坂と言った。

その後、山崎町も町制を施行し岡本半太夫の悴新氏が初代山崎町長になってからは工事も続行され城下村の村民も協力して一応新道路が完成するのは明治も中ば過ぎた頃であった。又、道幅が現在のように拡張されるのは昭和になってからである。昔は揖保川の高瀬舟や筏が唯一の産業動脈であったが世の中は漸次移り変り今では道路と車の時代であり、此の新道路も山崎龍野間の唯一の産業道路となった。

明治の末年から大正時代にかけては乗合馬車が通い、哀愁をおびたラッパの音と蹄めの音を響かせて遠藤坂を下って行ったのは今は遠い昔の思い出である。又、遠藤坂の名も今は知る人も少ない。

総道神社由緒記

当神社がこの地に鎮座せられた年代は不明ですが、その昔、山崎町が当時領主であった龍野藩主、木下勝俊によって新町の申し付けを受けたのが、約四百年以前のことであるので、そのころ町家の中心街を形成し始めた山田町、福原町、出水町、三町内の住民によって創建せられたものと考えられる。

祭神は、八嶋比古(やちまたひこ)の神、八嶋比賣(やちまたひめ)の神、男女二柱の神様である。これらの神々は市街地の守護神であって、昔、京都の街の東西南北四方の守りに祀られていたと伝えられ、山崎町家街の鎮守様として迎えられたものであろうと思われる。

又、神社の表通りは、東西が出雲街道、北行きが播磨一の宮伊和神社への参詣道路であり、その分岐点であった為に、玉垣の大柱の一本にその道標が彫られて、現存している。これらの点から、道祖神のように、道しるべの神とも仰がれ、神社銘の総道神社とは、そこから名付けられたものであろう。

尚、古老(故福田敏太郎翁)の言によれば(おそどさん)のお陰で三町には古来火事が表へ出たことがない。つまり、火事が起りかけても、半鐘が鳴って他町にまで迷惑をかけたことがない、あらたかな、有難い神様だとも言い伝えられる。

年中祭日

月並祭	毎月六日
新年祭	正月六日
夏季祭	七月六日
秋季例祭	十月六日

春の研修旅行記

志水美好

四月十九日、恒例の春の研修旅行に百六十三名の参加者があり、バス四台を連ねて出発した。晴天が長く続いて天候も安定していて、全くの旅行日和であった。赤松SAでは観光バスが多くて便所が混雑をきわめていたので、交通渋滞が気になったが、名神高速道路の車の流れは順調で、予定の時刻に京都東ICへ着くことができた。

勧修寺の参拝を計画していたが、下見に行ってみると、駐車場は狭いし境内を一巡するだけであったのでやめることにした。順路をかえて先ず醍醐寺へ行き、次に勧修寺の代りに随心院へ行くように変更させてもらった。

醍醐寺に着くと駐車場は車が一杯であり、修学旅行の生徒達で境内はあふれている。豊臣秀吉の醍醐の花見で有名な桜の名所であるが、既に花は散ってしまっていた。せめて一週間早ければ花見も楽しめたのだが残念でした。三宝院を拝観する。大玄関から入って、葵之間、勅使之間、表書院、奥宸殿、弥勒堂へと人波にもまれて進む。国宝・重文の建物や襖絵もゆっくり見ている暇もない。説明をしてくれる案内僧が間に合わず、各自思い思いに廊下を一巡した。最後になって若い案内僧から特別史跡になっている庭園の説明を聞かせてもらった。秀吉が醍醐の花見に際し築庭した回遊式庭園だそうだが、今は廊下から眺めるだけになっている。三宝殿を出て、国宝勅使門前を通って下伽藍に詣でる。国宝の金堂と五重塔、重文の清滝宮を大急ぎで廻った。西国十一番札所の上醍醐までは時間がかかるので初めからあきらめていたが、せめて五重塔のある下伽藍までは足を延ばしてほしいと思った。しかし、郷土研究会の方々の姿はまばらであった。

醍醐寺を辞して、少し北上し小野小町ゆかりの随心院門跡に行く。正面の薬医門は閉ざされていて、横の方から庫裡へ通された。二条宮家から移築された広い庫裡へあがり、美しく咲き誇る石楠花を眺め乍ら表書院へ案内された。ここで一同住職のご説明を拝聴する。私ごとき凡夫には門跡寺院としての由緒よりも、小野小町の話の方に興味がそそがれてしまう。小じんまりした山水の庭園と池に泳ぐ鯉を見ながら本堂に詣る。本堂のご本尊仏の後方に多くの仏像が並んでいる。その中から、小野小町文張地蔵と小町晩年の姿を写したという卒塔婆小町坐像を見つけて何んだかほっとした。奥の一室に小町の従兄にあたる書家小野道風の軸も展示してあった。庫裡を出た所の長屋門の土間

に茶席が設けられていて、赤毛氈を敷いた縁台で時間を気にしながら一服の茶を楽しんでいられる顔見知りの方もあった。駐車場の近くに小町化粧井があった。小野小町の屋敷跡に残る井戸というので、立寄ってカメラに収めていられる方もあった。

随心院から奈良街道を一路南下。宇治川を渡って程なく平等院前の駐車場に着く。すぐ近くの喜撰茶屋で少々遅くなったが昼食をとる。昼食後、赤い欄干の喜撰橋を渡って浮島十三重石塔を見に行った。弘安九年、宇治大橋再建成就を祈願して造られた日本最大の石造仏塔だそうである。一時半から揃って平等院へ参拝した。広い境内には次々と観光客がつめかけている。修学旅行の生徒達も実に多い。割合すいていたので先に宝物館へ入る。鳳凰堂の屋上を飾っていた創建当時の鳳凰一対が九百年前の姿のまま中央に陳列してある。日本三名鐘とうたわれ姿の美しさ日本一といわれる梵鐘も、藤原期の優美な模様を近々と眺めることが出来た。鳳凰堂の扉絵も実物がここの四周に展示されている。鐘楼へ降りると実物そっくりの復原模造の鐘がかけられ、見物客に快い響きを楽しませてくれていた。鳳凰堂は押しかける人波で常に満員の盛況であり、狭い堂内は説明を聞く人達で溢れんばかりであった。天喜元年、藤原頼通が建てた平等院創建当時の唯一の建物で、軽快で優美な姿は平安貴族たちのあこがれの極楽浄土の宮殿を現世に具現したものでした。大きな本尊の阿弥陀如来像と豪華な天蓋、美しい組入天上、長押上の雲中供養菩薩五十二体、扉や壁の仏画等、いつまで見ても見あきることがありません。阿字池の西の不動堂にある源頼政の墓に詣でる。庭の片隅に苔むした小型の宝篋印塔が、平家追討の兵を最初にあげ乍ら敗死した源三位頼政の墓である。鳳凰堂の北にある観音堂の裏手の扇の芝は頼政の自刃の跡と伝えられている。一般客の訪れは少なく、修学旅行生の群がガイドの説明を神妙に聞いているだけだった。集合の時刻になっても一、二の方の姿が見えず手間どった。時間の制約があるので一台だけ残して宇治を後にした。

三室戸寺は街道から東へ入った喜撰山の山麓にあって、西国十番の札所である。道路が狭くて対行車があると手間どったが、駐車場はよくすいていた。山門前で車毎に記念写真を撮ってから急な石段を登って境内に着く。唐破風のついた二層の美しい本堂と室町時代の様式を備えた三重塔が建っていた。団体客も少なく広い境内も閑散とした感じである。当寺の鎮守である十八神社の本殿は重文に指定されている由だが、お詣りする元気もなく床几に腰をおろして暫し休憩をとる人が多かった。遅れた車を待ったりして予定よりやや遅くなったが、午後三時半帰途についた。

晴れたり曇ったりの申し分ない天候であり、充分京都の春を楽しんでもらえたと喜んでいます。京都東ＩＣまで北上して名神高速道路に入ったが、車の流れは順調で快調に走ってもらって、午後六時半恙無く山崎へ帰着した。

「しゝさは」「志佐波」目次集

「しゝさは」第1輯

昭和8年8月15日発行

巻頭言　松下敏
宍粟雑考　安田喜一郎
本会が生まれる迄の経路（一）　安原源十郎
ゆく春　安井竹軒
郷土研究会の見学　遠足に加りて　同行の一人
宍粟手まり歌（その一・二）
彙報
桓武伊和神社に就て
薬仙寺薬師如来
長水軍記実録の出版
闇斎神社創建の企
山崎景物歌集上梓
会員名簿　昭和八年七月二十日現在
編輯後記

「しゝさは」第2輯

昭和9年2月20日発行

仏像彫刻史小話（一）　下村章雄
譲尾の観音と禅寺の鉦掛松と長谷の観音　藤平忠作
桓武伊和行　安田青風
郡内旧蹟巡り　船越行・長水行　耿堂頑夫
宍粟手まり歌（その三）
彙報
下村氏招聘
文字瓦発見
永井瓢斎氏と桓武伊和神社
長水城跡踏査
編輯後記

「しゝさは」第3輯

昭和9年7月15日発行

巻頭言　安田青風
仏像彫刻史小話（二）　下村章雄
宍粟郡の刀工、附千種鉄　加古未囚
郡内雑話　藤平忠作
郡北の方言　安原源十郎
鹿沢城池築造時期研究の一資料　安原
本会記事
編輯後記

「しゝさは」第4輯

昭和9年12月15日発行

揖保川　安田青風
仏像彫刻史小話（三）　下村章雄
俳人二頃庵年足　安井竹軒
飛鳥奈良朝の史蹟を巡る（一）　耿堂頑夫
印章綺談（上）　SB生
郡北の方言（二）　安原源十郎
闇斎先生の祭典及び講演
郡内の現状（一）
編輯後記

「しゝさは」第5輯

昭和10年7月1日発行

巻頭言　安田青風
歌人秋平の一面　安井俊二
飛鳥奈良朝の史蹟を巡る（二）　耿堂頑夫
余が小供時代の遊戯　安原源十郎
郡北の方言（三）　安原源十郎

彙　報
平泉博士の講演会
播州名所巡り　安井竹軒
三粋園之記
郡内の現状（二）
編輯後記

「しゝさは」第6輯　昭和11年7月1日発行

播磨風土記抄（安師里訳文）　安田喜一郎
郷土の概念
郷土展覧会を開催して　安原源十郎
山崎町の草分時代　安井俊二
東部日本回遊団に参加して　耿盧生
郡北の方言（四）　安原源十郎
宍粟郡誌に現れた倭漢薬　松本富治
郡内の現状（三）
雑　録
荒木教授の講演
郷土展覧会の開催
山崎篠丸公園の開設
黒田氏書翰の一部
遊鶴山比地の滝
故人句集上梓
田中家の古文書類
第一回郷土展覧会陳列品目録
編輯後記

「しゝさは」第7輯　昭和12年6月5日発行

播磨風土記抄（訳文）
宍粟郡と赤松氏（一）　栗山宗知
松陰先生の額　下村慶之助
琵琶歌　長水城　妹尾雅柏
三日月史蹟巡遊記　安井生
赤穂郡に於ける安師藩領地石高表　小林楓村
雑　録
山崎闇斎例祭
佐用郡三日月史蹟訪問
郡更正共進会
郷土史料展
日本刀展覧
山崎案内刊行
闇斎屋敷買収建議
郡更正共進会郷土史料陳列品目録
編輯後記

「志左波」第1号　昭和22年8月10日発行

発刊の辞　前野猛夫
宍粟郷土研究会の再発足に当って　志水富次
誌名『志佐波』に就て
『山崎往来』に就いて　安井俊二

食品の店
いまや
さつき通り4丁目
TEL ⑥2 0169

「安師」に対する松岡静雄先生の御教示　中村　潔
聖山城　栗山宗知
宍粟郡植物雑話　建部恵潤
「聞書帖」から— 播磨一ノ宮のこと —　黒田美隆
山崎町鹿沢字松原町発見の石器時代遺物　島田　清
表紙字「志左波」に就て
第一回総会の記
宍粟郡文化活動史料展覧会出品目録
宍粟郷土研究会発会式　妹尾正三
編後私記

「志左波」第2号

昭和22年10月20日発行

「聞書帖」から（二）— 播磨一ノ宮のこと —　黒田美隆
歌人　木村公棟　安井寅一
明治維新前後の酒造触書　前野猛夫
桓武伊和神社と古墳　藤平忠作
宍粟郡内諸村より出石・須賀両舟場迄の里程　前野貫一郎
宍粟郡と平氏　赤松円裕
代官望月新八郎　小島卓三
郷土の椀貸伝説「鬼面様」と「馬ケ渕」　島田　清
第一回実地踏査会の記　島田　清
姫路城使用紋瓦拓影
編後私記

「志左波」第3号

昭和23年3月5日発行

長州征伐と山崎藩（一）　前野貫一郎
神代三陵と宮崎市外古墳群見学の思い出　中村　潔
出石河岸の高瀬船（一）　三木辰由
山崎地方の気候　藤平忠作
江戸時代の「門前村」（一）　前野猛夫
安志開善寺の経筒　志水富次
郷土雑記帳（一）　安井俊二
宍粟郡富栖村関「平家邸」出土の五徳　島田　清
第一回講演会の開催　島田　清
第二回実地踏査会の記
編後私記

「志左波」第4号

昭和23年5月25日発行

江戸時代の「門前村」（二）　前野猛夫
出石河岸の高瀬船（二）　三木辰由
船越山にコヤスノキは自生していない　建部恵潤
長州征伐と山崎藩（二）　前野貫一郎
千草郷内十一カ村高附　安原源十郎
赤松氏総説　栗山宗知
山崎町の神社明細　志水富次
宍粟郡河東村須賀発見の「銅鐸」に就て　島田　清
郷土雑記帳（二）　安井俊二
「方言」に就て　志水フクミ
第二回講演会の開催　島田　清
編後私記

「志佐波」第2巻1号

昭和23年10月10日発行

巻頭言　前野猛夫
宍粟紀行（一）　田岡香逸
『播磨風土記』伝写史の一節（一）
— 宍粟郡への流伝 —　黒田美隆

『播磨風土記』に見える「宍粟郡高家里塩ノ村」　島田　清
郷土雑記帳（三）　安井俊二
山崎藩主本多忠可侯の人物　南部墨荘老人
船越山瑠璃寺吟行記　和田疎人
千種鉄（一）　小原義男
山崎に於ける道路の変遷　清水大吉郎
郷土伝説　夜泣き石　小松恵美子
宍粟郡地字表（一）
第三回講演会（一）　島田　清
編後私記

「志佐波」第2巻2号　昭和24年2月20日発行

活刷『志佐波』を見て　川島右次
山崎町の文化行政　村上彰治
宍粟紀行（二）　田岡香逸
『播磨風土記』伝写史の一節（二）　黒田美隆
ヘーサラバーサラ　山下駿次
明治十二年刊行の地理書に表わされた宍粟郡　中村　潔
古屋「千年家」を訪う　山根一生
郷土雑記帳（四）　安井俊二
幼少時の記憶　松本比呂一
宍粟郡のバレーボール　松本富治
塔　杉山義昭
所謂「明石原人」発掘現場を見学して　島田　清
編輯後記

「志佐波」第2巻3号　昭和24年8月20日発行

シモン・黒田孝高と山崎（一）　島田　清
宍粟紀行（三）　田岡香逸
「播磨風土記」伝写史の一節（三）
—宍粟郡への流伝—　黒田美隆
郷土雑記帳（五）　安井俊二
赤西国有林観楓採蘚紀行　建部恵潤
宍粟遊記（一）—光久寺—　東郷松郎
山坊緑雨—佐用郡三日月町高蔵寺吟行記—　和田疎人
牛に突かれた「牛追」　前野猛夫
編後私記

健康づくりの相談が気軽にできる店
ごころ薬局
薬剤師　岸本八重子
岸本弘子
山崎町東和通り・☎(0790)62-1190

昭和62年度　各部構成　（総務部は支部長全員）

資料部部長	史跡部部長	研修部部長	会報部部長
横井時成	久保寅夫	志水美好	大谷司郎
上木猛	福井益男	岸本正理	藤村清一
片山昭悟	深川春雄	三渡弘	谷川道一
安井道夫	山下宇一	福井久夫	織金義雄
志水豊章	伊野操治	高野薫	加藤昭彦
	志水正信	垣口正信	根岸元彦
		野上久男	

昭和六十二年度　地区幹事

西町	横須	下宇原
門前	庄能	須賀沢 出石
加生	中広瀬	高所 中
本町西	今宿	神谷 三谷
本町東	山田	岸田・矢原 野々上
元山崎	東鹿沢	三津 五十波
山田町	中鹿沢	田井 与位
福原町	本鹿沢	宇野・下町 生谷
北魚町	西鹿沢	東下野
寺町	〃	上下牧谷・大谷・中野
紺屋町	千本屋 御名	上ノ上 上ノ下
伊沢町	野・船元 下広瀬	木谷 市場
出水町	中井 鶴木	青木 塩田
富士野町	春安・段	高下
鴻ノ町	金谷	葛根
旭町	比地	大沢
大才町	川戸	土万 塩山
上寺	宇原	

事務局だより

一、秋の研修旅行案内を会報に挿入しています。参加ご希望の方は早目にお申し込み下さい。このたびは初めての試みとして一泊二日旅行を計画いたしました。錦秋の木曾路の旅をお楽しみ下さい。

二、第七〇号より創刊号からの目次を順次掲載ご紹介いたします。

三、会報に掲載の広告をご希望の店舗があれば事務局へお知らせ下さい。

（山崎郷土研究会事務局）
山崎町
安井清介宅

最新型カラー現像機導入
カラープリント・スピード仕上げ

宍粟郡山崎町東鹿沢26-3☎62-2089

株式会社
安井書店
宍粟郡山崎町山崎90
TEL山崎㊷0700(代)

楽しいくらしのお手伝い
ホームセンター
アクロ

竜野店
竜野市竜野町富永
☎(07916)3-3226(代)
営業時間AM10:00～PM7:00
(定休日) 毎週水曜日

山崎店
宍粟郡山崎町今宿
☎(0790)62-2434(代)
営業時間AM9:00～PM7:00
(定休日) 毎週水曜日